

## 柳田邦男、次男洋二郎の死を語る

「心の時代—再び生きる力を」 NHK 教育 4/14/2002

「癒し」というコトバがよく使われる、でも子どもを亡くした場合に、そんな癒してなまやさしいものではない。

息子の死後、自分が変わったなと思うのは、自分の感情にわりと素直になった。笑う時には笑い、泣きたい時には泣くというような。



感情に対する素直さ、これは本当は人間が生きていく上で大事なもの。

11 日間の無言の会話は、それ以前の僕とそれ以後の僕を深〜いところで変えてしまう貴重なものだった。

人がどんな風に心が動かされたりするかというのは、私の場合、はらわたを剔られるというように、体の奥底が揺さぶられるというような感情体験でした。全身で感じるのと考えるのが一体化して、そこで爆発するような、自分の中で動くものがある。

何かを証明したり、理屈づけたり、あるいは同じことが他の人にも起こるからそれは真実だということではなくて、いま自分の中で起こっているだけでいい、でもそれは自分にとっては何となく重要なこと、これを瞬間の真実とでも言おうかなと思うのです。

もともと子どものころ、僕は泣き虫だった。姉が二人いて、泣き虫の僕に「男のくせに」と年中冷やかされた。なんとか強い自分になりたい — 子どものころの課題だった。

悲しい話でも、自分と距離をおいて対象化して見る癖を訓練するように自分に言い聞かせていた。結果、作家活動のうえでも、事実を強調した。

息子の洋二郎さんは、それに反発。親父が何事につけ物事を対象化して冷静に見る、それをたまらない気持ちで見ている。

### 「我と我が身に引き受けて考えたことあるのかよ」

「親父は作家だろう、作家だったら世の中のことを他人ごとのように書くんじゃなくて、自分の中の地獄をかけよ」

僕の全人生が否定されるような、今までの作家活動を根底から崩される感じ、生きている

ことを否定されるようなきつさがあった。

僕らの考え方は、すごく科学に毒されている。科学だけでは人生は語れない。洋二郎の遺体が家に着いたとき、偶然衛星放送でタルコフスキーの映画「サクリファイス」がはいっていた。「哀れみたまえ私が神よ」というバッハのアリアが流れていた。

人間の関係の中で、ボヤっとしたものがある。そのボヤっとしたものを切り捨てるのが科学。このボヤっとしているものこそが大事であって、そこにこそ魂というものがあるんだ。



自分の子どもが死ぬというのは、人生に最大の事件。国家が転覆するよりももっと重大な事件だと思う、一人の人間にとって。

田舎の駅で、汽車が止まってしまっていて、エンジンが故障して動かない、だけれどしばらく休んでいたら、何故かしらんが動き出して、また次の駅に向かって発車した。

お父さんも自分を見つめなさい。内観を勧められた。なぜ息子が患っているのに、父親が修行しなければいけないのか、ためらった。

癒しとは、心地よくなって忘れていたりすることではなくて、真っ正面から悲しい事実と向かい合ってもらえる、**逆にそういうものを大事にして、時には糧にするような意味で、それをしっかり背負って生きられること、それが癒しなのかな。**

死って、すごい力をもっている。死ってのは、決して終わりじゃなくて、あとを生きる人に対してものすごく影響力をもっている。なにか**内面的な財産をもらうような**、そういう生き方ができる。

(資料：永田 円了)